

ソ連における三島由紀夫の受容

——ペレストロイカ期・革命のアイコンとしてのミシマ——

村上 智子

はじめに

二〇一三年六月十一日、ロシア連邦議会下院において、同性愛宣伝禁止法案は圧倒的多数の賛成で可決された。

「非伝統的な性的関係」を未成年に宣伝することを禁じたものである。ただし、どのような行為が「宣伝行為」になるのかは具体的には示されておらず、当局の恣意的な介入を許す恐れが大いにある。「同性愛」のイメージが強い作家、三島由紀夫の作品もロシアでどのように扱われてゆくのか、注目すべきところである。

三島由紀夫は、ロシアにおいて安部公房・村上春樹と並んで最も人気のある日本の作家のひとりである。そして三島のロシアでの受容においてユニークなのは、ソ連時代に発禁になっていた、という点である。原因はその

生の終わらせ方によってファシストだと認識されたことと、同性愛的な表現が元々同性愛への偏見が強いロシアではよしとされなかったことにより、検閲を通らなかつたからだと考えられる。

ソ連でロシア語に翻訳された三島作品がはじめて公に出版されたのは、ペレストロイカ期である。一九八八年に、雑誌『外国文学』^{〔1〕}に、若き日本文学研究者であり『外国文学』の編集者でもあつたグリゴリー・チハルチシヴィリによる三島に関するエッセイ風の評論「聖セバスチャンの殉教、あるいは死に魅せられし者」^{〔2〕}とともに、彼の手になる『憂国』のロシア語訳が掲載された。翌年一九八九年五月には同誌に、チハルチシヴィリ訳の『金閣寺』が掲載された。三島作品に対するソ連の読者の反

響は大きなもので、ミンスクの刑務所では『憂国』に影響を受けた四人が割腹自殺するに至ったという。チハルチシヴィリの翻訳・紹介の仕方が、ソ連（ロシア）における三島の受容のあり方を決定づけたといっても過言ではない。

本論ではチハルチシヴィリがこの評論において、三島をどのように形容しているかについて着目する。彼は、三島（作品）を形容する際の形容詞として「魔術的」「神秘」など、人智を越えるものを表現する際に使われるような単語をことさらに選んでいる。作品が発禁扱いを受けるなど、否定的に扱われていた三島に対し盲目的崇拜の姿勢を表明し読者に見せつけるチハルチシヴィリの語り方には、彼の「戦略性」を読み取ることが可能である。何故なら「宗教はアヘンだ」と断じるソ連体制下で、人智を超えた神秘にひれ伏せ、と語ることはブルガーコフの『巨匠とマルガリータ』に代表されるようなソ連抵抗文学の系譜に連なるものだと考えられるからである。また、彼は評論の中で『憂国』についても述べており、『憂国』の登場人物を「殉教者」だと語っている。これは、

ペレストロイカ期において特別な意味を持つと考えられる。チハルチシヴィリの評論にこめられた戦略性を、同時代のソ連文学との比較から考察したい。

一 ソ連における日本近代文学の受容——雑誌『外国文学』を中心に——

三島由紀夫はソ連において、「その思想のために、禁止されていました。ご存じの通り、彼はその晩年にファシストになったのです。だから、例えばその初期の小説は、晩年の思想とあまり関係がなかったにも関わらず、禁止されていました。」^[4]と、アレクサンドル・A・ドーリン氏（ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員）は述べている。一九六九年にソ連共産党の機関紙「ソヴィエツカヤ・ロシア」が「楯の会」を批判し、ソビエト大百科事典においても三島に関しては否定的な記述がなされていたことを考えると、国家当局によって三島作品が「禁書」扱いとなっていたとしても不自然ではない。では、三島作品はどのような過程を経て「禁書」となるに至ったのだろうか。

ソ連において出版物が刊行されるしくみは次のようなものであった。

出版社から提出された原稿は検閲官が掲載禁止リストや最新のプラウダの論説(昨日の英雄が今日は人民の敵になるという政治的潮流の激変に適応する必要があった)等と照合、修正を要求するかまたは掲載を却下し、問題がなければ出版を許可する^[5]。

そして、検閲はグラヴリトと呼ばれる検閲機関が行っていた。ソ連機関紙に「楯の会」を批判されていたことから、グラヴリトに託された「掲載禁止リスト」の中に三島由紀夫の名が連ねられていた可能性は高い。また、スターリン政権下など、表現によって命そのものを奪われてしまうという事態も実際に発生していたため、それを考慮し表現者自身が翻訳などを含む表現を自粛したということも十分考えられる。「社会主義リアリズム」を文学も体現するべきである、とされ厳しい検閲が行われていたソ連で、日本の文学はどのように翻訳・紹介されてきたのだろうか。

一九二〇〜三〇年代には林房雄・宮本百合子など、プロレタリア文学の作品ばかりが翻訳され、「日本文学」として紹介されていた。第二次世界大戦後から、それまで出版されていなかった日本の古典文学が翻訳され出版されるようになった。一九五四年には、『万葉集』から近代までの日本の韻文作品のロシア語訳アンソロジーが出版された。六〇年代では芭蕉の句集が翻訳出版されるようになった。一九七一年には『万葉集』全訳が、一九七〇年終わりごろから八〇年代にかけて、『平家物語』『大和物語』とはずがたり^[7]などが翻訳・出版されたという。

古典において、散文の作品よりもまず俳句や短歌など、韻文の作品が翻訳出版された背景には、韻文が主流であったロシアの文学的伝統が関係しているであろう。また、思想的に「禁書」リストに挙げられにくいという点もある。日本は資本主義国であり、またアメリカ合衆国と経済的な結びつきが強く天皇も現存しているなど、社会主義国ソ連とは相容れない点が多くあった。それゆえにプロレタリア文学を除く日本近代文学を研究・翻訳するという行為はリスクを伴うものであったと考えられる。

文学作品の出版をめぐる問題において、大きく流れが変わったのは、ペレストロイカ期である。一九八五年にゴルバチョフ書記長が就任し、ペレストロイカ政策が始まった。そして、一九八六年の第二七回党大会において検閲に対する批判が集中したため、検閲の厳しさも緩和され、それまで制限されていた表現を持つ作品が世に出るようになった。雑誌『外国文学』は、ソ連においていわゆる「西側」の文化を紹介する雑誌として機能してきた。一九八〇年代半ばから後半（すなわちペレストロイカ期）には、ナボコフやブロツキーなど、「亡命ロシア人」の作品も掲載された。日本文学の作品では、一九八五年一月から一九八八年九月までの間に、安部公房『方舟さくら丸』、井上靖『愛』、林京子『同期会』のロシア語訳や、開高健『ロビンソンの末裔』、津島佑子『夜の光に追われて』の書評が掲載された。チハルチヴィリ訳『愛国』と、彼による評論はこのような流れの中で世に出たものである。

二 シシマ滅びず——チハルチヴィリの戦略性——

まず、チハルチヴィリがどのような経歴を持つ人物なのか述べておきたい。彼は一九五六年にトビリシ（現在のグルジアの首都）で生まれ、モスクワ大学で日本文学を専攻した。大学卒業後は、雑誌『外国文学』の編集にたずさわりながら、日本文学の翻訳を行っている。三島由紀夫の作品が発禁扱いだった時代からひそかに彼の作品の翻訳を行い、ペレストロイカ期に翻訳したものを世に発表するようになった。ソ連（ロシア）において三島由紀夫を広く知らしめるのに多大な貢献をした人物といえる。そして彼の三島観がロシアにおける三島由紀夫のイメージを形作ったとも考えられる。ソ連において「辺境」の地であったグルジアで生まれ育ったという事実と、日本という極東の「辺境」の文学に興味を持ち、その特殊性がクローズアップされがちな三島由紀夫に深く関わることは無関係ではないとも考えられる。それは彼の三島への関心の持ち方、現在の政治的なスタンスからも読み取ることが可能である。一四歳の時に三島の割腹自殺を知り衝撃を受けたという原体験をきっかけにして、一九九九年に自殺した作家たちについて論じた『自殺の文学史』を出版した。その頃からボリス・

アクーニンという筆名で探偵小説を発表し、数々の賞を受賞している。二〇〇五年には丸山健二の短篇集のロシア語訳を刊行し、二〇〇七年には第一回野間文芸翻訳賞を受賞している。ソ連で発禁だった三島の作品を粘り強く翻訳し続けた姿勢が高く評価されたものである。政治に関する発言も目立っており、プーチンが「正しい」歴史を教科書に載せようとする風潮に危惧を覚えて自ら「ロシア史」の編纂にあたって、政府側とは違う歴史観を提示しようとしている。

先述の通り、一九八八年十月の『外国文学』には『憂国』のロシア語訳とともに、翻訳者のグリゴリー・チハルチシヴィリによる評論（エッセイ風のもの）が掲載されている。チハルチシヴィリによれば「何回かの不成功に終わった^{〔9〕}試み」の後、念願かなって掲載されたものである。タイトルは、『聖セバスチャンの殉教、あるいは死に魅せられし者』（サブタイトル：三島作品における自己崩壊に関する論考）であり、タイトルからもチハルチシヴィリはこの論考において主に「死」のモチーフに焦点を当てていることがわかる。

彼はまず、三島の切腹事件について「市ヶ谷の自衛隊駐

屯地で起こった流血劇の後、以前には理解できないと見られていた多くのことを明らかにし、全てをあるべきところに配置したこの一日の屈折を通してでなければ、三島という存在について見極めることは不可能だ。」と述べている。チハルチシヴィリは三島の作品を紹介する際に、読者の興味をひきつける方法としてセンセーショナルであった彼の切腹事件を引き合いに出すのではなく、三島の創作生活と実生活のすべての結晶として三島の死に方を提示し、作品が内包している性質と彼の死を結びつけようとしているのである。

三島の死を彼の美学の結晶とする考え方そのものは、チハルチシヴィリだけのものではない。澁澤龍彦の三島観にも、そのような特徴はある。澁澤は「三島由紀夫覚書^{〔10〕}」の中で、このように述べている。

もとより三島氏は特殊な感覚、特殊な嗜好、特殊な信念、特殊な哲学をいだいていたひとである。存在の確証が、ただ存在の破壊された瞬間、死の瞬間のみによって保障されるだろうという哲学は、少なくとも万人向けの

哲学ではないし、何よりもまず検証不可能な哲学と言わねばならぬ。ぎりぎりのところは神秘主義と呼ぶほかはないだろう。(中略)要するに三島は死んだ。その余は文学のみだ。残された三島の文学的存在論を私たちが読むということだ。これが特殊を普遍に転換するだろう。

三島が「特殊な哲学」を持っておりそれは作品の中にも表現されているということ、「特殊な哲学」を体现するものとして彼の死があることを述べているところはチハルチヴィリと澁澤は同じである。しかし澁澤は文学によって三島の哲学を「普遍」に転換できるものとしている。澁澤は「特殊」な立場から、傍観的に友人三島由紀夫を語っている。チハルチヴィリは対照的に、三島の哲学の特殊性を「神秘的」なものとして持ち上げている。盲目的崇拜ともとれる姿勢である。この姿勢をペレストロイカ期のソ連で打ち出したということに彼の戦略性を見出すことができるのではないかと考える。

チハルチヴィリは、三島の切腹事件が、日本では「極右まがいの政治的な行動」とみなされ、「三島の生前は彼の

著作を読まず、疑念や敵意さえ持って彼に接していた国粋主義者たちは、三島をすぐに『本当の侍精神』の持ち主として認め、毎年彼の命日を記念している。」と憂国忌⁽¹²⁾について分析している。

三島をいわば「右翼のアイコン」として祭り上げた右翼主義者たちの行動・反応がソ連の文学研究者たちにさえ影響を与えてしまったとチハルチヴィリは述べる。政治的な立場でのみ文学を評価するというソ連の立場によって、三島は「ファシスト」というレッテルを貼られ、ソ連の読者の三島作品を読む機会が奪われてしまったことを彼は嘆いている。三島の作品を出版することをタブーとしてきたソ連の政治体制・それを甘受するしかなかったソ連文学界への批判がここでなされている。

ソ連で三島が「ファシスト」というレッテルを貼られ、彼の作品が発禁になりソ連の読者へ三島由紀夫の作品が行き渡らなかつた歴史を振り返った後で、チハルチヴィリは現在には「矯正や暴露なしに、文学的分析を単純化されたイデオロギー的図式と取り違えずに⁽¹³⁾」三島の創作と人生を落ち着いて眺めることができる」と述べ、そこから評論の話

題は三島（または三島作品）の持つ特徴的な性質に移る。彼は、三島を形容する際の形容詞として「魔術的」「神秘」「宿命」など、人智を越えるものを表現する際に使われるような単語をことさらに選んでいる。例えば次のような文章からそれがうかがえる。

疑いようのない作家（三島・引用者注）の才能、無論病的だが、それゆえ（病的であるのと・引用者注）同じくらい明らかで鮮やかな才能だ。天才、それは常に奇跡であり自然の神秘である。そのように普通のものさしを使って奇跡に近づく必要があるだろうか？ そのような人の魂は特別で唯一無二のイメージでつくられている、私たちにはその魂の判断はゆだねられていない。理解しようとしてとめるだけだ。^[14]

実際、彼の全人生は、彼の作品に描写されているような血みどろの終末へ向けられたものだった。衝撃を受けた同時代人の「なぜ？」という疑問に対する全面的な回答は三島の作品の中に描かれている。彼の作品は不吉で

魔術的な輝きを帯びた死の美学的概念だ。^[15]

ここで彼は三島を「人智を超えたもの」として表現し、「普通の」人間が理解できない境地に三島はいるのだ、と崇拜に近い態度をとっている。長らくソ連で作品が発禁とされてきた作家を人智を超えたものであると崇める姿勢をとることは、原則宗教が禁止されていたソ連において暗に体制を批判する性質を帯びる。

ソ連時代の反体制的なメッセージを帯びた文学作品の金字塔としてあげられるものに、ミハイル・ブルガコフ作の『巨匠とマルガリータ』^[16]がある。これは、小説家の「巨匠」とその愛人マルガリータ、悪魔たち、巨匠の描く小説の登場人物（イエス・ピラト）が登場し、時間・空間を越えて活躍する「魔術的リアリズム」の小説である。悪魔たちは、反宗教的な考え方をするソ連の知識人たちを嘲笑うような言動を繰り返す。人智を超えた「魔術的なるもの」によって、当時（一九三〇年代、すなわちスターリンの大粛清が行われていた時期）のソ連社会への批判と諷刺が行われているのである。

物語の第一章で、教授に扮した悪魔が無神論者の雑誌編集者と詩人にこう言い放つ箇所がある。

「よく覚えておいてください、イエスは存在していたのです」

「いいですか、教授」無理に作り笑いを浮かべて、ペルリオーズは言い返した。「あなたの該博な知識には敬意を払っておりますが、それでも、この問題にたいしては別の見解をもたないわけにはゆきません」

「どんな見解も必要ありません！」と奇妙な教授は答えた。「とにかくイエスは存在していた、それだけのことで」

「しかし、そうはいつでも、なんらかの証拠が要求されます……」とペルリオーズは言いかけた。

「いかなる証拠も要求されません」と教授は答え、低い声で語りはじめたが、このときには奇妙な訛りはなぜかなくなっていた。

絶対的なものを信ずるべきであって、そこに理屈はいらな

い、というこの教授（実際は悪魔だが）の姿勢は、三島由紀夫を「凡人の理解するべきではない神秘的存在」天才」と持ち上げて、いわば神格化するようなチハルチシヴィリの姿勢と重なるものがある。

また、『巨匠とマルガリータ』は悪魔の「原稿は燃えない」という台詞で有名な小説であり、ソ連時代の知識人たちはこの台詞を合言葉にして地下出版などを重ね体制の圧力に耐えてきたという背景もある。ソ連当局の検閲を経ない文書は、「サミズダート」と呼ばれた。検閲で「ノー」を突きつけられるような書物がタイプされ、コピーされ、手から手へと伝わっていた。これらの行為は当局にスパイの嫌疑をかけられ、サミズダート文書は押収されたが、人々は監視の目をくぐってサミズダート文書を手にしていたという。例えばソルジェニーツインの作品は、『ガン病棟』収容所群島』など、密かにタイプされ国外で出版されていた。三島の作品がサミズダート文書になっていたかどうかは定かではないが、検閲などで出版不可になり押収された作品は図書館で非公開放いとして保存されていた事実があるため、三島作品そのものは一部の人間の目に触れ、日本語を読み

る者のあいだで密かに読まれてきた可能性はある。

三島の作品を公に出版することがタブーとされる中で、はつきりした発表のあてもなく作品を翻訳し続けてきたチハルチシヴィリも、「原稿は燃えない」という言葉を胸に秘め続けていたのではないだろうか。

また、一九八〇年代後半には当局の思想的締め付けのゆみを反映してか、新聞などのメディアに宗教的な要素をもつ記事が掲載されるようになる。一九八五年一月二月には『文学新聞』が神秘哲学の影響を受けたヒッピー族がソ連にもあらわれていることを報じている。一九八八年には同紙にこれまで反動的とされてきた宗教者・哲学者のページ全面的紹介欄が設けられた^[20]。これらの宗教的な記事は、ペレストロイカを象徴するものであったといえよう。そして、チハルチシヴィリの評論もこの流れの中に組み込まれるもののだといえる。

その政治的な理由で三島の作品がソ連でほぼ読まれてこなかったことを憂えているなら、三島の政治的主張を連想させるものを見てみぬふりをして、政治色のない作品を紹介することも可能だったはずである。明らかにソ連の体制

とは対立するような主張を自衛隊駐屯地で行って割腹自殺した三島の行為をあえてクローズアップし、彼の作品に登場する「特殊な哲学」と彼の死を結びつけて論じ紹介したこと、そして三島を盲目的ともいえる態度でもって称えるということは「宗教的」な色彩を帯びるものであった。それはソ連においては長らく続いた政治体制への「革命的」行為として機能しうるものだったといえる。

三 『憂国』が選ばれた理由とは——『美学の殉教者』として——

そして、ソ連ではじめて大々的に紹介される三島作品のロシア語訳が『憂国』だったことは、チハルチシヴィリが三島を宗教的なアイコンとして紹介しようとする戦略と大いに関係があると考えられる。彼は、評論の第6章で『憂国』について、あらずじを述べた後に次のように記述している。

三島は、彼が考える真の日本の魂の所有者を描き出した

いと望んでいたが、彼の才能は強固な作者のたくらみを明るみにしている。話が進むにつれて出来事は後景にしりぞき、悪夢のような儀式的な思想的な内容は忘れられていく。そして突然、悲劇的な喪失の耐え難い病的な感覚が、二人の若者の全人生と愛の破滅が生まれる。しかし、そのような結末の感覚は主観的なものだ。やはり作者は露骨に全く別の効果を期待している。ここに生じている高尚な理由によって証明することができないような喪失の感覚には、作爲的で時として馬鹿げたセンスに似るような様式で邪魔をすることは適当ではない。これは以前には洗練された唯美主義者の三島にそぐわないものであった。^[2.1]

三島は「日本的魂」の持ち主を称揚し、天皇制をかかげるファシストであるというソ連政府の見解をひっくり返すような記述である。そして、「高尚な理由によって証明することができないような喪失の感覚」の具体例について、武山中尉が切腹する場面での執拗な描写が、彼の「皇軍万歳」という「大義」よりも目立っていることを挙げ、「若々しく

美しい身体の苦しみに満ちた死こそ、まさに聖セバスチャンの宿命だ、そして三島にとってはそれが幸福の最たるものだったのだ^[2.2]」と述べている。ここで彼は、二・二六事件直後の武山中尉とその妻麗子の儀式めいた死を「セバスチャンの殉教」にたとえている。天皇制というイデオロギーそのものよりも自身の特殊な美学に殉ずる者の避けがたい宿命を、政治的権力を帯びていない宗教的なものにたとえることによって前景化しようとしているのである。チハルチシヴィリは「まだ感じられない死苦、この遠い死苦は、彼らの快感を精錬した^[2.3]」という『憂国』の一節を引きながら、「運命の鎖があらわれている^[2.4]」と、三島が持っている、苦しみこそがエロティシズムを引き立たせるのだという美学が中尉と麗子の中にあらわれていることを指摘している。武山中尉と麗子という『憂国』の二人の登場人物は、三島美学の殉教者だと彼は述べているのである。

時にそれが体制に背くことであっても自らの信念に殉ずる者を、宗教という枠組みを使って描き出すことが、この評論と同時代のソ連の文学作品にもみられる。ペレストロイカ文学の旗手と呼ばれていたチンギス・アイトマトフ

の小説『処刑台』^[25]では、持ち前の無垢さと強固な信念でもって教会内部や麻薬売買などの不正を告発する主人公の元神学生アヴジイの様子が描かれている。

「わが教会はつねに私と共にあるでしょう」アヴジイ・カリストラートフは譲らなかつた。「わが教会は私自身です。私は神殿を認めません。ましてや僧侶、特に今日のような性質の僧侶を認めません」(中略) 後になつてアヴジイは実際にこの戒めを幾度となく思い出したものである。だがその度にアヴジイ・カリストラートフは、彼の使命の主要なもの、ある最高の意味はかなたに見える地平線の輪郭のようにもつと先にある、そこへ至る途中で起こるどんな不慮の自体も生活上の困苦も一時的なものにすぎず、彼の示した模範に多くの人々が倣う日がやがてはやつてくるだろう。そして自分はこの為に生きているのではないだろうか、と思うのだった。

彼が麻薬を扱う者によって迫害され「磔刑」のような

形で死ぬ場面は、アヴジイの姿は次のように描かれている。

節くれだつたサクサウルに手足を縄でくくりつけられたアヴジイは、吊されて乾かされている毛を剥がれた生皮のように、吊された。(中略) 酔つて虐待する男たちはアヴジイの足元で火を焚こうとあせつていたが、彼はもう気にしていなかつた。(中略) 胸は激しく痛み、耐えがたい、気の遠くなるような痛みが傷めつけられた腹を掻きむしつた……。そして雪融けの洪水に浸され、沈んでゆく小島のように意識が遠のいていった。

『オカ川の僕の小島……。師よ、あなたをお救いするのは誰?』彼の最後の意識が火花のように燃えあがつて、消えた……。

暴力を振るわれて、「師」イエス・キリストを呼んで最期を遂げるところは、新約聖書の「使徒言行録」に登場する殉教者のイメージと重なる。無神論者であり、ソ連共産党員でもあつた著者アイトマトフがソ連体制下で見過ご

されている不正の告発者にクリスチャンを選んだということに、ペレストロイカ期において宗教性を担ぎ出すという明確な戦略性が見て取れる。つまり、体制に対抗できる絶対的なものとして宗教を利用する必要があったのだ。

宗教を利用して体制を批判する文学者たちの系譜は、先述のブルガーコフや、信仰心を貫いたソルジェニーツィンなど、スターリン時代から脈々とつづられてきた。彼らは作品が日の目を見ることはないだろうと思いつつも、作品を執筆し続けた。また、ソルジェニーツィンはフルシチョフの「雪解け」の時代がはじまるとすぐに、体制を批判する小説を発表した。共産党員でありながら麻薬問題というソ連のタブーを「元神学生」の視点から告発したアイトマトフも、身を賭して体制批判を行うソ連の文学者たちの系譜に連なっている。そして「日本語の原本や翻訳原稿などを非常に注意深く隠す必要があった」中で、着々と三島作品の翻訳を進め、言論に関する規制が緩和されたと同時に宗教を担ぎ出すことよって体制を批判する評論を世に出したチハルチシヴィリも、同じ系譜に数えられるのではないだろうか。チハルチシヴィリの『憂国』に関する評論

は、三島由紀夫と『憂国』の登場人物たちを宗教性と強く結びつけ、体制に対する「革命」のアイコンとしての三島像を強固にした。さらに、『憂国』を体制に対する抵抗のテクストとして提示するための役割を果たしていたと考えられる。

おわりに

これまで、ソ連における日本文学の出版事情をふまえたうえで、チハルチシヴィリの経論と『憂国』の翻訳が雑誌『外国文学』に掲載されたことが、ペレストロイカ期においてどのような意味を持つのかを考察してきた。チハルチシヴィリの評論には、三島由紀夫を「神秘性を帯びた天才」として提示することで三島という存在に「宗教性」を付与しようとする戦略性があることが読み取れる。また、『憂国』論においては、小説の中で自害する二人の登場人物を殉教者聖セバスチャンになぞらえることで、『憂国』をペレストロイカ期のソ連文学の系譜に位置づけることを可能にして

いる。^[26]

本論では扱うことができなかったが、以上のようなチハルチシヴィリの戦略性がどのように『憂国』ロシア語訳にあらわれているのか検討する必要がある。チハルチシヴィリの『憂国』ロシア語訳に関する先行研究としては、バジム・ブシマキン氏の「三島由紀夫の『憂国』と大江健三郎の『セヴンティーン』…見る主人公と見られる主人公⁽²⁷⁾」がある。氏はロシア語訳において、検閲等の関係でいかに政治的なニュアンスがなくなつたかに焦点をあてて論じている。しかし、チハルチシヴィリの『憂国』論を参照すれば、天皇制などの政治的ニュアンスよりも、「美学の殉教者」としての武山中尉と麗子を強調したいという彼の意図があることは明確である。翻訳されたテキストを参照し、考察を行いたい。

また、先述のブシマキン氏の論文には、チハルチシヴィリの『憂国』ロシア語訳に対して当時のソ連メディアにおいてどのように評されたかについて言及がある。『憂国』の翻訳におけるチハルチシヴィリの戦略性はどこまで有効だったのかについても分析を行う必要がある。そして、『憂国』の映画を三島自身が監督・主演しているということや実際

に彼が割腹自殺したということから、三島自身の生の終わらせ方や彼の政治思想とからめて語られがちなこの小説の新たな読み方を、チハルチシヴィリの戦略性から示してゆきたいと考えている。

〔注〕

1 原題は《Иностранная Литература》。

一八九一年に現在のサンクトペテルブルグで原型となる雑誌が創刊された。現在の名称となつたのは一九五五年からである。

現在でも月一回発行されている。ソ連およびロシアにおいては代表的な、「外国」文学を紹介する雑誌といえる。

2 Чхадтшвилли Г. Мученичество

Святого Себастьяна, или

завороженный смертью // Иностран

Лит. — 1988 — №10 — С. 203 — 212

なお、引用部分の翻訳は引用者、翻訳校正は楠哲也・トーマス氏によるものである。

3 ボリス・アクーニン「ロシアの作家ミシンカ」『MISHI

MA! 三島由紀夫の知的ルーツと国際的インパクト』二〇一

○・一二、昭和堂)

4 アレクサンドル・A・ドーリン「ソビエットの日本文学翻訳事情：古典から近代まで」(一九九三・一、国際日本文化研究センター)

5 寺山恭輔「ソ連における検閲」(20世紀ロシア史と日露関係の展望：議論と研究の最前線、二〇一〇・三、九州大学出版会)

6 注4の寺山恭輔氏の論に、「スターリン時代には自由な表現によって被る肉体的な抹殺にさえいたる不利益を考慮して、表現する当事者が自己防衛的に表現を抑える自己検閲も生む。皆と同様であれば安心であるが、それによってオリジナリティーを喪失することにもなる。一九三〇年代の検閲機関の文書が多く残され、以後減少したことは自己検閲の賜物であるとの指摘がある。」とある。

7 注4に同じ。

8 田村充正「ロシアの三島文学」『ユリイカ』二〇〇〇・一(一)

9 注3に同じ。

10 после кровавого спектакля,

устроенного на военной базе
Итигая, уже невозможного
рассматривать феномен Мисимы
иначе как через призму этого
дня, который разъяснил многого,
казавшееся прежде непонятным,
расставил все свои места

11 「三島由紀夫覚書」初出は『海』一九七六・十一(引用は『三島由紀夫おぼえがき』(一九八六・一一、中公文庫)所収のものによった。)

12 Националисты, при жизни
Мисимы отнюд не в шинеся к нему с
подоэреннием и даже
в раждебностью, не читавшине его
книг, немецдленно обьявили
писателя носителем «истинно
самурайского духа» иеже годно
отмечают годовщину его
смерти

13

безспрямленийиобличений,
неподменяялитературный
анализупрошениной

14

идеологическойсхемой
неоспоримыйталантписателя,
талант,безусловно,
болезненный,нооттогоне
менеочевидныйи

яркий.Гений—всегдачудо,
загадкаприроды,такнадолги

походитькчудуособычными
мерками?Душатокого

человекаустроенаособым,
неповторимыйобразом,намне

даносудитьее—лишьпытаться
понять.

15

всяжизньписателя,
отраженнаявего
произведениях,была,посуди

дела,подготовкойккроваво

Финалу.Исчерпывающийответ
навопроспотрясенных

современников《почему?》дан
настраницахнаписанных

Миссимойкниг.Творчество
писателяосвещенозловещими

магическимсияниемего
эстетическойконцепцией

16

смерти.
引用部分是水野忠夫訳『巨匠とマルガリータ』(二〇〇八、
四、河出書房新社)

17

ユリウス・テレシン「検閲に抗して—ソ連の「自立出版」の
内幕」(『朝日ジャーナル』一九七三・四)

18

兔内勇津流「ソ連の非公開資料群の公開—図書館のグラス
ノスチー」(『カレントアウェアネス』一九八九・七)

19

ソ連憲法においては信仰の自由は保障されていたが、ソ連
中央政府は無神論の立場をとっており、キリスト教の教会を
はじめとする宗教団体はひっそりと活動することを余儀なく

された。レーニン・スターリン・フルシチョフ時代には教会の爆破や閉鎖、聖職者の逮捕・殺害など、宗教弾圧が行われていた。ロシア正教とソ連政府の関係性については廣岡正久『ロシア正教の千年 聖と俗のはざまで』（一九九三・一二）、日本放送出版協会に詳しい。ペレストロイカ期においては、宗教弾圧も緩和された。

20 源貴志「ペレストロイカ文化略年譜」〔『ユリイカ』一九九

一・五）

21 Мнисимахотел покозатъ, какних
людей он считает носителями
истинно японского духа, но
талант okazaлся сильнее
авторского замысла. По мере
развития событий отпускает,
забывается идеяная подоплека
кошмарного ритуала, и в друг
рождается жгучее, болезненное
ощущение трагической утраты,
напрасной гибели двух молодых

полных жизни и любви
человеческих существ, —
впрочем, такое восприятие
финала субъективно; во всяком
случае, автор явно рассчитывал
на советского иннои

Эффект Возникающему чувству
потери, которую невозможно
оправдать никакими высокими
резонами, неспособен помешать
даже претенциозный,
временами графичный дурачный
кусомястиль, прежде не
свойственный утонченному
эстету Мнисиме

22

мучительная смерть молодого,
красивого тела, — сама
участь святого Себастьяна, и
была Мнисиимы вьсшим

- 23 初出は『小説中央公論』（一九六一・一）、引用は『決定版
三島由紀夫全集』第二〇卷（二〇〇二・七、新潮社）によつ
た。

24 РОКОВАЯ ЦЕПОЧКА ВЫСТРОИЛАСЬ

25 引用部分は佐藤祥子訳『処刑台』（一九八八・三、群像社）

26 ペレストロイカ期には、検閲の緩みが関係してか、ソ連社会の暗部を告発する小説が出版されるようになった。そのような体制批判的な小説では、様々なテーマ・モチーフが扱われたが、そのうちの一つに宗教（主にキリスト教）的なものがある。キリスト教をモチーフとした体制批判的な小説には、本論であげたアイトマトフ『処刑台』の他には、V・エロフエーエフ『ヴァルブルギスの夜、あるいは石像の登音』（一九八五）などが挙げられる。この作品では、精神病院の患者が看護師に暴力をふるわれても十字を切り続けたりする場面や、患者内での「いじめ」として「祈りの言葉」をすべてソ連政府のスローガンにして「お祈り」をさせるなどの場面が描かれている。宗教を通して強烈な体制批判が行われていたことが窺える。